



2分でメロディ浮かんだ「平城山」 東京音楽学校は独学で合格

作曲家 平井 康三郎氏(5回)

INTERVIEW

④

平井先輩は、明治四十三年
吾川郡伊野町生まれ。土佐中
から東京音楽学校(現東京芸
大)へ入学。本科(バイオリ
ン科)から研究科(作曲部)
へ進み、在学中から作曲活動
を行う。代表作は交声曲「不
盡山をみて」「大いなる鼓」「大
仏開眼」歌曲「晩秋の歌」「ゆ
りかご」「平城山」「スキー(山
は白銀)」など。校歌・社歌など
を含め作曲は五千曲に及ぶ。東
京芸大教授を経て、大阪音楽大
学教授。紫綬褒章受賞。

平井家は有名な音楽一家で、
友美子夫人はバイオリニスト、
長男丈一朗氏はチェリストで
巨匠カザルスの後継者、二男
丈二郎氏はピアニスト。

— 高知へ帰られることは？
「去年帰り、校歌の編曲をし
ましたので、母校へも寄って、
合唱部に校歌の合唱を指導
しました」

— 土佐中の寮歌を作られた
のはいつですか。
「一年の頃です。三根校長が
音楽の常盤先生に作曲しろと
言われたらしいんですが、で
きなくて「平井、お前やれ」

— 当時の先生方や教育設備
などはいかがでしたか。
「ほとんどの先生方が旧制高
校の教員の資格を持っていて、
授業の内容も高度でしたね。
入学試験も黒板博士の「アメ
リカ魂」という論文を読んで
感想を述べよとか、三分間で
魚の名前を三十以上書けとか。
教室の後ろに国語・漢和・
英和・和英辞典など八種類の
辞書や参考書を三十名分入れ
た書棚があり、授業中わから
ないところがあると、自分で
引きに行くことになっていま
した。文武両道という言葉が
ありますが、当時の土佐中は、
三根校長のお考えで、文字ど
おりの文武両道で、文の中に
は、音楽教育などの情操教育
も入っていて、グラランド・ピ
アノや最新式の蓄音器なども
ありました。ただ、最初は聴
く人がいなくて(笑)。岡村さ
んが「もったいないから聴こ
うよ」と言いだして聴くよう
になりましたが、ピアノは怖
がってだれもさわらない(笑
い)。そのうちぼくが弾くよう
になって……」

— 先生はどなたですか。
「独学です。ピアノもバイオ
リンも作曲も。スポーツは柔
道をやっていました。一度
曾我部清澄さん(1回、前校
長)に投げられた時、彼がぼ
くの上に倒れてきて、約一か
月入院したことがありますよ」
— 土佐中時代に漢詩の方言
訳をなさったとか。
「忘年会の茶話会の余興に、
普通のやり方では面白くない
ので、漢詩を方言訳にした詩
吟をやったのです。『男子志
を立って郷閭を出づ/学も
し成らずんば死すとも帰ら
ず/骨を埋む豈墳墓の地のみ
ならんや/人間到る処青山あ
り』を、『おらも思わくがあ
つて都へ出たきに/成功者に
ならざつたら死んだら帰らん
ぜよ/ナンチャー』どこで死

— 校歌もずいぶん作曲され
ていますね。
「千曲くらい作曲しているら
しいです(笑)。高知県内だ
けでも三百以上あるでしょう
か。追手前・土佐女子・伊野
商・明德学園……」

— 甲子園出場校が多いです
ね(笑い)。
「上尾高や東洋大附属姫路も
そうですね。よくフツかつて、甲
子園の季節になると週刊紙が
取材にくるんですよ(笑い)」